

八月の 夢花火 色あせず

「77」。この数字を見て、真っ先に何が思い浮かぶだろうか。

年配のプロ野球のオールドファンなら、読売ジャイアンツのV9黄金期に監督を務めていた川上哲治の背番号が思い浮かぶかもしれない。もっと若い世代の野球ファンなら、中日・阪神・楽天などの監督だった星野仙一の背番号だ、と言う人もいるかもしれない。

宮城県出身の人なら、「銀行」（仙台が本店の地銀は七十七銀行）という人が多いかもしれないし、化学者は、原子番号77の「イリジウム」と答える人もいるだろう。7が一つ足りないが、パチンコ好きのお父さんには、ちょっと刺激的な数字に見えるのではないだろうか。

そもそも「77」は何て読むのだろうか？テレビのアナウンサーは、よくよく注意して聞いていると、NHKは「ななじゅうしち」、TBSは「ななじゅうなな」で統一して使用しているようだ。「しちじゅうしち」という読み方ももちろん間違いではない。いろんな顔をもつ「77」なのだ。

さて、今年8月に入って、この数字をよく目にしたりよく聞いたりすることが多くなった。そう、今年には終戦77年目にあたる。

新型コロナウイルスによる行動制限が3年ぶりに解除になり、久しぶりに実家に里帰り、盆帰りしたり、本家に親戚一同が集まってにぎやかに過ごした人も多かったかもしれない。

コロナでなくても、以前ほどは故郷にみんながたくさん集まって、という機会も時代とともに少なくはなってきたと思う。ひと昔前までは、お盆休みといえ、親戚中が集まって、一年で一番の大にぎわいのお祭り騒ぎだった、などという家庭も多かったように思える。

私の祖父は、明治43年生まれで昭和50年に67歳で亡くなった。祖父は、女・男・男・男・女の5人兄弟の2番目だったが、祖父が健在の頃は、兄弟（私にとっての大おじ・大おば）家族が、本家である私の実家に集まりみんなで墓参りを済ませたその晩は、飲み、食い、花火に、ゲームに、スイカ割りにと、一年間で一番楽しいひとときといっても過言ではなかった。

そんな賑わいの中の、祖父とその下の次男にあたる大叔父との晩酌の席に、私は、物心ついた頃から祖父が亡くなるまで、いつも付き合わされた。

その席に三男の大叔父はいない。二人の酔いが深まって話出すのが、その弟の話だ。太平洋戦争に22歳の若さで志願して出征したこと。中国広東省で銃殺されて亡くなったこと。男兄弟三人で遊んだ幼い頃の思い出……。

私にとって威厳と風格に満ちた、涙など無縁だと思っていたいい年した爺さん二人が、「若かかったのにかわいそうなことをした。」と、時折目に涙し

ながら酒を手にしてしみじみと話をする様子は、ずしりと心に響き、決して亡くなった大叔父の死を普通のことと受け止めることはできなかった。

夏の思い出でもう一つ忘れられないのが、近所の通称「クワガタおじさん」のことだ。麦わら帽子とサンダルの似合う、お地蔵様のような人だった。

夏休みになると、近所の子どもたちを連れ出してはよく遊んでくれた。カブト虫やクワガタ、コーロギやセミやチョウチョウなどの昆虫採集に、フナやザリガニ釣り。ビワにイチジク、アケビ、ザクロ、蓮の実、なども一緒に採り方や食べ方を教えてくれたりもした。

家にも遊びに来て、よく祖父と酒を飲んでいた。そのおじさんも、太平洋戦争帰りの一人だった。酔いが深まると、きまって戦争の話をし始める。

そして、その内容は、戦争の“現場”での“蛮行”の数々。詳しいことはここには書けないくらい醜くて残酷なことだ。でもその話をするおじさんの様子は、悔恨の念というよりはむしろ兵隊としての武勇伝にも聞こえた。

我々子どもたちがみんな大好きな、ヒーロー的な存在のおじさんの、昼間のやさしい顔と、聞くもおぞましい戦争体験を平然と話す顔。このギャップをどう埋めていいものか。この2つの仮面をもつおじさんの、本当の顔はどっちなのだろうか。そのコントラストが、戦争の異常さ悲劇さを増幅するようで、幼心に胸が締め付けられる思いだった。

さて、例年この時期になると、様々な戦争に関するニュースや記事が、テレビや新聞や雑誌等で特集をされる。夏休み前に全校に紹介したが、新潟日報でも、例年「あちこちのすずさん」という企画を通して、祖父母や近所のお年寄りから伝え聞いた体験談を作文にしたり、インタビューを記事にしてまとめたものを募集している。応募するしないは別のこととして、ぜひ、こういった機会にこそ、子どもたちにも積極的に、このように自分から戦争について知ろうとする機会を、保護者の皆さんにも、自分から子どもたちに戦争のことを知ってもらおう、伝えようとする機会をつくってほしいと思う。

77年間、我々は直接的に戦争を体験してこなかった。しかし、実際、その間も、そして今も、どこかで戦争は起きている。戦争は悪。戦争は不幸なこと。戦争はあってはならないこと。戦場に子どもたちを送りたくない。戦争の記憶を風化させてはならない。そんなのは誰でもわかっている。

戦争の悲劇と愚かさ、平和の尊さを教えることは、学校や保護者や地域の大人の使命である。大切なことは、子どもたちに、いかに自分事として受け止めさせることができるかどうかだと思う。まさか、今起きている戦争に身を投じて体験させるわけにはいかない。有効なのは、できる限り身近な人間、生身な人間が、子どもにとってできる限り新鮮で信頼性のある情報を、真剣にそして繰り返しもたらずことができるかどうかだ。

今年、長岡花火も3年ぶりに復活した。花火には、「慰霊・復興・平和」への思いが込められている。一度でいいからあんな見事な花火を見せてあげたかった、という人が私にはいる。きっと、あなたにもいるに違いない。